知的障害特別支援学校における対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造（2）

―小学部における『「やってみたい」という思いを育む授業作り』―

小鍋　壮史・手塚　則子・齋藤　由紀・石川由美子・司城紀代美

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要　第7号　別刷

2020年8月31日

知的障害特別支援学校における対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造（2）†

―小学部における『「やってみたい」という思いを育む授業作り』―

小鍋　壮史*・手塚　則子*・齋藤　由紀*・石川由美子**・司城紀代美***
宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校*
宇都宮大学共同教育学部**
宇都宮大学大学院教育学研究科***

本稿では，知的障害教育特別支援学校小学部における授業作りに関して，児童の「やってみたい」という思いを基に授業を展開することを目指して検討を重ねてきた。主体的に活動したり，自分の思いを相手に伝えたりすることを大切にした授業作りのポイントについて検討し，小学部1組（1・2年生）における生活学習「作って食べよう」と小学部2組（3・4年生）における生活学習「絵本で遊ぼう」の授業作りに関する実践を取り上げ，各々の成果と課題について言及した。

実践を通して，自己選択場面を設定することで授業内容や教材教具への関心を高めたり，授業場面以外でも自分の思いを伝えようとしたりする姿を引き出すことができた。

キーワード：やってみたい，自己選択，主体性，授業作り，知的障害特別支援学校

Ⅰ　はじめに

本校の小学部児童は，思いをもっていても表現することが難しかったり，関わり方が一方的になりやすかったりするなどの実態がある。友達同士の関わりを育む場面は休み時間が中心であるが，学校生活全般を通して関わる主な相手は教師になることが多い。児童の実態を考えると，低学年では友達同士で関わりながら活動することは難しいものの，高学年になるにつれて少しずつ周囲の友達との関わりが増え始めてくる様子が見られる。

本校では，令和元年度からの2か年で「対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造」を研究テーマとして設定した。対話性を「相互主体的に，自分の考えを表現したり他者の考えを受け止めたりする中で，新たな認識を柔軟につくり出す態度や性質」と捉え，子ども主体の学びを大切にしている。小学部においては，児童の実態を踏まえて，対話性の中でも，特に「自分の考えを表現する」という部分に注目して，研究を進めていくことにした。

知的障害を有する児童にとって，自分の思いを相手に伝えることは，難しい課題ではあるが，社会生活を送る上で必要となる重要な能力の一つである。また，他者とコミュニケーションを図れるようになることは，卒業後の生活を豊かにするためにも必要である。

そのためには，安心感のある学習環境の中で，「おもしろそう」「楽しそう」「好き」「知りたい」「できるようになりたい」等といった様々な思いを育んでいくことが大切になる。それらが「やってみたい」という思いにつながり，周囲の教師や友達に思いを伝えたいという意欲にもつながるのではないかと考え，本テーマを設定した。

---

† Takeshi ONABE*, Noriko TETSUKA*, Yuki SAITOH*, Yumiko ISHIKAWA** and Kiyomi SHIJO***: Educational Practice for children with intellectual disabilities from the view point of “dialogicality” (2)
Keywords: “Let’s try it”,Self choice, Independence of will , Lesson planning, School for children with intellectual disability
* Special Needs Education School Attached to Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University
*** Graduate School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：ym_ishikawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp）
（連絡先：shijo@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

Ⅱ　目的と方法

本研究では，主体的に活動しようとする思いをもつためにはどのような条件が関係するのか，自分の思いを相手に伝える力はどのようにして育むことができるのかといった点について，授業実践を重ねる中で有効な手立てを明らかにしていく。児童の「やってみたい」という思いを基に，授業を展開することを目指して実践を重ねる。

Ⅲ　対話性を重視した学びに基づく授業作り

自分の思いを相手に伝える力を養うことや主体的に活動する思いを高めるための工夫等，実践していくにあたっての授業作りのポイントについて学部内で協議した。

自分の思いを相手に伝える力を養うために，関わる相手としては教師を基本として徐々に広げていけるようにと考えた。小学部では低学年から高学年になるにつれて，親や教師との関わりに変化が出てくることから，子ども同士のつながりの重要さが一層増してくるものの，まずは一対一でのやりとりに慣れることが必要となる。

また，主体的に活動する思いを高めるために，選択することを通して，自分の思いを表現することを大切にしようと考えた。さらに，児童が興味関心を示すような教材教具の呈示，何をするのかが分かる学習環境の設定が大切であると考えた。以上のことをまとめたものが表1である。

表1　授業作りのポイント

○関わる相手は教師を基盤として，徐々に広げていけるようにする ○自己選択できる場面を設定する ○分かりやすい環境を設定する

これらの授業作りのポイントを年間指導計画や題材計画に取り入れ，小学部の教師一人一人が授業実践を行った。授業研究会を開き，授業作りのポイントの有効性を確認したり，新たな視点を見出したりすることで，対話性を重視した学びの有効性について検討した。また，実践を通しての児童の変容を記録・検証することによって，よりよい授業作りができるように活かしていきたいと考えた。

次に，授業実践例を報告する。

1　実践1：1組「つくって食べよう」における授業作り

小学部1組は，1年生3名，2年生3名の計6名の児童が在籍している。学校生活にも慣れ，授業に積極的に参加することができるようになってきた。人との関わりに関心がもてずに，一人で遊ぶ児童もいるが，休み時間には，食べ物の絵本を見たり料理のまねごとをしたりして，自分から教師や友達と積極的に関わる児童が増えてきている。

一方で，友達を気にするあまりに，友達の意見に左右されやすく，選択肢の中から好きなものを選ぶことが難しい場面が多く見られるのが課題である。

自分の好きなものを選択し決定していくことは，よりよく生きていく上で重要なことである。「つくって食べよう」では，「食べたいものを考える」「材料を選ぶ」「工夫して作る」等，様々な活動を行うことができる。作った後に食べる活動があることで，より興味をもって楽しく取り組むことができる。

そこで，本実践では，自分の好きなものを選び，工夫しながら作る喜びや楽しさを経験させたいと考えた。その中で，教師と相談したり，友達の様子を見たりして，人との関わりが多くもてるような授業作りを目指して検討を行った。

(1) 実践の経過

①　教師と相談したり友達の様子を見たりして好きな材料を選ぶ場面

事前調査（保護者）により好きな材料を確認し，全員が好きな材料を選べるようにした。また，友達の様子が見えるように，コの字型の座席を設定した。作りたいもの（クレープのトッピング）を考える際には，視覚支援教材（図1，図2）を活用し，興味・関心や学習意欲を高めるようにした。

エピソード1「友達のものと見比べる」 視覚支援教材を使って，完成イメージを作る場面。AさんとBさんは，「これ，入れる」等と話しながら，自分で考えて好きな材料を選択し，クレープの完成イメージを作ることができていた。作り終えると，隣同士の二人はお互いに見比べて，「クリーム，一緒」「苺，同じ」と楽しそうに会話をしていた。

図1　クレープ作りの視覚支援教材

図２　視覚支援教材の活用例

② 材料の乗せ方や包み方などを教師と一緒に試行錯誤しながら行う場面

クレープの完成イメージを作った後，実際のクレープ作りに取りかかった。自らの完成イメージを見ながら，材料をトッピングすることができた。クレープの包み方は，3パターンの写真を用意した。

エピソード２「教師に確認しながら」
完成イメージと実際のクレープ作りの関係性がつながっていなかったＣさん。完成イメージを作る視覚支援教材には，材料のシールを全部貼ってしまっていた。実際にクレープを作る際には，教師の顔をのぞき込んで確認しながら，一つ一つ材料を置いていた。少しずつやり方が分かると，安心して自ら材料を置く様子が見られた。

(2) 考察

① 小学部内研究会での話し合いから

作って食べる活動は児童にとって魅力的であり，最初から最後まで授業を楽しんでいた。「こんなものが作りたい」という思いをもって取り組むことができる状況作りと合わせて，本人が「できた」という達成感を味わえる内容であったと思われる。

本実践では，「(材料に) 何を選ぶ？」と聞くことによって，児童の思いを引き出すことができた。また，作っている中で，友達の様子にも関心を向けていた。それにより，児童同士でクレープを見せ合ったり，会話したりといった関わりを増やすことができた。教師の意図的な言葉かけにより児童同士の関わりが増えたことから，改めて言葉かけの重要性を確認することができた。

② 成果と課題

本実践を通して，①自分で選択すること，②分からないときや不安に思うときには教師に相談すること，③自分の作ったものと友達の作ったものを比較したり友達と話したりながら楽しく活動することの3点について，児童は学ぶことができた。魅力的な素材を使い，「やってみたい」という思いを大切にしたことが土台にあったからだと思われる。

一方で，自分で選択することが難しい児童に対して，どのように働きかけていけばよいかという課題も残った。日常生活の様々な場面において，自分で選択できる機会を多く設定していくことで，思いを伝える素地を育てていきたい。そして，自分の思いを表現することを通して，人との関わりがもてるように，引き続き取り組んでいきたい。

2　実践２：２組「やさいオバケになろう」における授業作り

小学部2組は，3年生3名，4年生3名の計6名の学級である。

人との関わり方においては，自分のやりたいことに友達を巻き込もうとしたり，反対に友達が介入してくることを嫌がったりするなど，自己主張が強く見られる。一方で，興味関心の近い友達と一緒に楽しそうに遊ぶ様子が見られることから，友達への関心の高まりも感じている。また，絵本に対する関心は高く，自ら読むことは難しいものの，読み聞かせが好きな児童は多い。

本実践では，読み手と聞き手がやりとりをしながら絵本を読み合い，その後で絵本の世界とつながった環境の中で遊ぶ「読み合い遊び」を行う。絵本の世界で遊ぶ中で，自分のやりたいことを実現したり，教師や友達と関わったりしながら，他者への関心を高めていきたい。そして，自己選択しながら夢中で遊びに入り込む中で，楽しいと感じたり，達成感を味わったりできるようにしたいと考えた。

尚，読み合い遊びでは，児童の興味関心に合わせて，絵本や教材を準備することが大切になる。遊びが展開される中で，教師は児童の「やりたい」思いに寄り添い，遊びのきっかけを作ったり，遊びのモデルを示したりすることで，児童一人一人が遊びに入り込めるように支援していく。

(1) 実践の経過

① 児童の興味関心を適切にとらえた，絵本選びや教材作り

エピソード１「食べ物の絵本と絵本に出てくる大鍋」
大鍋の中で起こっていることを気にしながら，直接絵本の世界とは関係のない電車になったり，大鍋の周りに戻ったりしていたＤさん。みんなには鍋に

入るように声をかけていたが，自分は入らない。そこへ，大鍋に入ったり出たりしながら，活発に遊んでいたＥさんが，「ねえＤくんも入ったら？」と声をかけると，Ｄさん「しょうがない。そんなに言うなら～」と言いつつ，大鍋に入り「これでいいか。Ｅくん！」とＥさんに呼びかけていた。

学習活動の初めに読んだ「オバケカレー」という絵本では，主人公（きつね）が持つカレー粉の香りに誘われ，野菜のオバケが次々に大鍋に入ってしまう場面がある。食べ物や調理に興味関心の高い児童が大鍋にみんなで入ったら，関わりが生まれるきっかけになるのではと考えた。そこで，段ボールで大鍋と鍋の蓋を作り，教室の中心に配置した。大鍋は本実践において，児童全員の遊びのよりどころとなった。大鍋を介して，児童同士の関わり合いが生まれた。

図３　授業の様子①（大鍋で遊ぶ様子）

② 一人一人が遊びに夢中になれる手立ての工夫

エピソード２「児童の興味を引く素材」
教師は「おにぎりを作ろう」とＦさんを誘ったが，自分ではやらずに教師がおにぎりを作る様子を見ていた。しばらくしてから，自分でお花紙を使って，おにぎりを作るＦさん。おにぎりを教師に渡し，教師が食べる真似をして「すっぱ～い」というと満足していた。その後，おにぎりが出てくる好きな絵本（「おべんとうしろくま」）を片付けると，「オバケカレー」に出てきた大鍋のところに行き，段ボール製の大きなしゃもじを使ってぐるぐる混ぜた。
また，Ｆさんの行動を見て，お花紙に気付き，それを大鍋に入れる動作を繰り返すＧさん。お花紙を調味料か何かに見立て，鼻歌のようなものを歌いながら，大鍋に入れることを楽しんでいた。

ＦさんもＧさんも普段一人遊びや大人と関わることが多い。Ｆさんは，以前「おべんとうしろくま」の絵本を読んだとき，おにぎりに興味を示していた。またＧさんは，ままごと遊びのとき，友達の混ぜている鍋の中に，いろいろな物を入れて遊ぶ様子が見られていた。普段の児童の様子から，遊びのきっかけになりそうな物を準備し，モデルを示したり誘ったりした。

図４　授業の様子②（おにぎり作り）

(2) 考察

① 小学部内研究会での話し合いから

本実践では，絵本の世界でその子なりの遊びを展開することができた。児童全員が同じ世界観で遊ぶことは難しかったが，お互いを気にするような様子も見られた。自由遊びという形態の中で，一人一人の思いが十分に表現できていたと感じている。

小学部内研究会では，さらに遊びを発展させるための提案として，遊びにストーリーを設定したり，途中で何かイベントを起こしたりといった意見が出た。教師側の意図を少し加えることで，児童同士の関わりをより増やすことができるのではないかという意見である。また，より学習効果を高めるためには，自由遊びにおけるT1とT2の連携，役割分担のあり方について検討していく必要性が挙げられた。

② 成果と課題

絵本への興味関心が高まり，読み合いの場面では，絵本の内容によく反応し，楽しむ様子が見られた。「オバケカレー」の絵本の文脈に緩やかに影響されつつ遊ぶことで，場所や物を共有する場面が生まれ，人と関わる場面も増えた。現段階では，児童と教師との間でのやりとりが多いものの，今後は児童同士が関わりを深められるような手立てを工夫したい。

Ⅳ　全体考察

実践1「つくって食べよう」では，自分の好きな材料を選択することを通して，自分の思いを表出することを目的として実施した。「作って食べる」活

動は児童にとって関心の高い活動である。自分で作って食べるという一連の流れの中で児童は達成感を味わうことができたと考える。また，児童によってクレープの中身が異なることで，友達が作っている様子にも興味を示す児童もいた。

実践2「やさいオバケになろう」では，絵本の読み合い遊びにおいて児童のやりたい遊びを引き出すとともに，友達同士の関わり合いを広げることを目的として実施した。遊びを通して絵本そのものに興味関心がもてるようになったり，絵本に出てくる大鍋などを用いてそれぞれが思い思いの遊びに夢中なったりすることができた。また，教師や友達を遊びに誘ったり，友達の遊びを見て同じ物に興味を示して遊んだりする場面も見られた。

二つの実践を通して，「やってみたい」という思いを大切にすることで，児童が主体的に活動したり，自分の思いを相手に伝えたりといった場面を引き出せることが分かった。その思いを育むために検討してきた授業作りのポイント（表1）も，有効であることが確認できた。

授業作りのポイントの一つに挙げた「分かりやすい環境を設定する」ことは，児童の不安感を軽減し，落ち着いて授業に参加できる効果があった。学習内容，学習の展開，学習環境（教材の使い方，動きやすい動線等）を分かりやすく設定することは，「やってみたい」という思いの土台にあると考えられる。

次に，「自己選択できる場面を設定する」ことに関しては，学習場面に関わらず日常のいろいろな場面で，自ら選択できる場面を積み重ねていくことが，一人一人の主体的な思いを作る上で必要であると，改めて感じた。実践1では，「こんなクレープが食べたい」という思いをもち，好きな材料を選んでトッピングをした。実践2では，絵本の世界にある大鍋や素材が配置された環境の中で，各々の興味関心に基づいて遊ぶ物を選び，遊び方を考えるといった姿が見られた。どちらの実践においても，活動に魅力と自由度の高さがあり，それが一人一人にとっての選択の幅の広さを生んでいた。だからこそ，主体的に取り組む姿を引き出すことができたのであると思われる。

一方で，選択をすることで意思を示しても，好きな物を選んでいるのか，友達の真似をしているのか等，何を基準にして児童は選択をしているのかについては疑問が残るところもあった。自分で選択することが苦手な児童への支援については，さらに検討していく必要がある。

しかし，その点については，小学部内研究会でも話題に挙がった。そこで共有したことは，自分が活動したことを振り返ることの大切さである。自分の選択したもの，活動したことを言語化するという過程を経て，個人内言語や情操は豊かに育っていく。これは，表出が難しい児童においても同様であり，児童が選択する場面に合わせて，教師が言語化することで少しずつ育っていく。児童の内面の成長を支援することで，「やってみたい」という思いや自分で選択する力が育っていくものと考える。

今年度の取り組みを基に，小学部児童における対話性を重視した学びについて，引き続き研究を通して検証していきたい。

付記

本稿は，宇都宮大学教育学部附属特別支援学校における令和元年度校内研究の小学部研究（メンバー：阿部正明，石川雄大，小松崎信彦，増淵有美，小鍋壮史，齋藤由紀，手塚則子，石川由美子，司城紀代美）として共同で取り組まれているものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

参考文献

三浦光哉（2019）「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業改善とは．実践障害児教育，No.548，10-11.

谷田育弘（2019）「対話的な学び」に着目した生活単元学習の授業改善．実践障害児教育，No.548，16-19.

丹野哲也（2017）知的障害教育における主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善．特別支援教育研究，No.724，2-7.

高垣隆治・池本喜代正（2001）自己選択・自己選択の力を育む授業－知的障害養護学校の作業学習を通して－．宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，第24号，186-196.

令和2年4月1日 受理

Educational Practice for children with intellectual disabilities from the view point of “dialogicality” (2)

Takeshi ONABE, Noriko TETSUKA, Yuki SAITOH, Yumiko ISHIKAWA
and Kiyomi SHIJO